

# 廃病院

犬屋小鳥本部

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『桜ヶ原小学校同窓会へようこそ』の廃病院にまつわる話をまとめました。

まとめただけなので、他の作品見ると発見できます。

# 目次

始まりはホラー動画から	1
『ラブ・レター』	11
病院の夢	30
姉と妹「もつと歩道橋の下には」	36



# 始まりはホラー動画から

毎度、ご利用ありがとうございます。

ホラー動画を探し隊、山田でえっす！

えー、今日は動画を紹介じゃなくって

(画面が少し上下に揺れている)

(暗い中、道を歩いている)

(足音と虫の鳴き声だけが聞こえる)

自分たちで動画を作ろうってことになりました！

いえー！いい！パフパフ！！

ということだえ

さくさく進めていきましょう！

第一回目はこの山田がお送りする「病院」！

(↓↓↓↓↓までオープニング)

(ばばー！)

(効果音と共に字幕が現れる)

「以前ここには病院があった。別に事件があったということではないが、他にいい感じの場所が見つかった為移動することに。」

機材やら何やらはもちろん全て運び出され新しい病院へ。古い方にはもう何も残さ  
れていない、はずである。」

そう。何も残っていないはずなんですよ。

でもね。新しい病院での営業が始まってから、変な噂が流れ出したんですよ。

(後ろに真つ暗な病院が。電気はひとつも着いていない)

古い方の病院のとある部屋には、まだ電話が残っている。つてね。

はーい、失礼しまーっす。

(がちや)

(病院の入り口を開けて入っていく)

(画面下に許可は得ていますの文字が)

(懐中電灯の灯りだけで病院の廊下を進んでいく)

(カツンカツンと靴の音だけが響いている)

でえ、その電話が残っているという部屋がこちらです。

(懐中電灯の灯りに浮かび上がった扉)

(プレートには編集でモザイクがかかっている)

おかしいですよねえ、電話だけ残っているなんてで、噂には続きがあります。

その部屋に入ると電話がなるんだと…

んなバカな…

というわけで…

いってみよう！

(ぎい)

(鈍い音と共に扉が開かれる)

(真つ暗な部屋)

(物は何も無い)

(机と椅子が残っている)

(懐中電灯で部屋をぐるりと一周照らす)

(一瞬電話が写るがスルー)

ほらー。やっぱり何もな…

?!?!?

(電話を二度見)

あつたー！

ありやがったー！

まさかここで鳴るなんてこと…

(電話が鳴り出す)

鳴ったー！

電気とか来てないはずなのに

鳴ったー！

(電話のコードをアップにする)

(コンセントは刺さっていない)

(コードは途中で切れている)

そんなばなな!?

(字幕で死語(笑)と出る)

やばい…

ここは出るべきか、否か…

ここは…

(字幕で

↓出る

出ない



と出る)

俺は、出ない!!

(しばらくして電話が鳴り止む)

セーフ!セーフ!!

今の出たら絶対ヤバイやつだった!

(額の汗を大袈裟に拭きながら)

ふいー…ふいー…ふいー…

(電話が置かれている机の上に万年筆とメモ書きが)

(近づいてアツプに)

(「御用の方はこちらへおかけください」)

かけよっか。

(ボタンを押して電話をかける)

どーせかかんないってー

(3コール目で繋がる)

?!?!

もつもすもす?!

(字幕で囁んだ(笑)と出る)

「お電話ありがとうございます。」

こちら○○病院、受付でございます。

当病院は移動しました。

繰り返します。

当病院は移動しました。」

(女性の声で案内が入る)

ありや？

移動したって案内じゃんか。

しよーがねーなー。

これで動画はおわ

(目の前に大きなガラス窓)

(懐中電灯を着けているためガラスに自分の姿が写る)

(電話をかけている男(自分))

(その後ろに写る

看護婦の姿

自分以外いるはずない。

いるはずないのだが、窓にははっきりとナース服の女性の姿が写る。

その女性も受話器を手に持っている。

今、俺が聞いている案内をしているのは、あの女だ。

俺、この部屋に一人のはず。

窓に写っている女は……？)

窓に写る女と目が合う。

女はにやりと笑った。

真つ赤な口紅に塗られた唇が目をひいた。

うしろに いる よ

女の口がゆっくり動く。

俺の うしろ

うしろ

(ぞくつ)

ぎゃ—————!!!

(大声をあげて逃げ出す)

(画面に大きく「しばらくお待ちください」と出ている)

(↓↓↓↓からエンディング)

というわけで、山田は無事に帰還しました！

いえーい！

怖かった！俺が！怖かった！

廃病院に電話が残ってても！

もしその電話が鳴っても！

みなさん、無視してください！

ましてや、かけ直しやいけません！

山田お兄さんとの約束だぞ☆

では、次回の「ホラー動画を探し隊」を楽しみにしてください！

チャンネル登録よろ！

そいえば、かかってきた電話にすぐ出てたら別ルートに？

に、二度目は行かないんだからね！！

『ニュースです。

本日市内にて絞殺死体が発見されました。

場所は〇〇アパート、被害者は山田〇〇さん、32才、男性、職業ユーチューバー。  
繰り返します。

本日……』

後日、僕はあの動画を再び見ると、「女性がうしろにいるよと言っている」シーンで女性の手が山田さんの首に伸ばされていることに気がついた。

初めて見たときはこんなことになっていなかったのに。

昼にやっていたあのニュースは、「あの」山田さんのことだ。

山田さんは一応顔出しユーチューバーだったから。

この動画と何か関係があるのだろうか。

## 『ラブ・レター』

あるホラー動画を観た。

山田さんという人が廃病院に行き、残されていないはずの電話が残っていて、それが急に鳴り出す。止まったけど、山田さんは電話をかけ直す。「移動しました」という案内が入る。そりやそうだよなー、で終わると思ったら目の前のガラスにいないはずの女性が写る。

というもの。

私と友人はその廃病院に行ってみた。

その動画の病院が本当にそこなのかは断言できなかったけれど、地元でも同じような噂は聞いていた。

ただ、私の聞いていた噂はもう少し詳しくかった。

ある看護婦と医師が付き合っていた。

彼女は嫉妬深い性格で、医師は見目が良かったため頻繁に他の看護婦と噂になった。遂には彼女は彼と心中しようとした。

という話だった。

実際に心中事件はあって、それがどうなったのかは知らない。

止めておけばいいものを、私と友人は好奇心に負けて廃病院へ向かった。

まだ病院がやっていた頃には、何度も利用したこともあるその病院。そんな場所に夜中忍び込むなんて：

なんてドキドキワクワクするの！

私たちはホラーや絶叫系等のスリルがあるものが好きという共通の趣味を持っていた。

一緒にDVDを借り漁り、互いの部屋に泊まって、朝方まで興奮と震えが止まないまま手を繋いでテレビに釘付けになることなど数えきれないほど経験した。

私たちは、とても仲のよい親友だった。

出会いは、とても覚えていないけれど。何でも話せる互いに唯一の人。

それが、私たちの共通の認識だった。

そんな私たちが近場に「おもしろそう」な穴場があると知った。これは行くしかない。時刻はもう既に夜10時を過ぎていた。辺りはもう真っ暗だったけど、病院が近いということ、そしてふたり一緒だったことが背中を押してすぐさま向かうことにした。

病院に着くと外も中も真っ暗だった。



他にもそこへ行った人がいるのだろう、入り口の鍵は壊れ門は風にガタガタと揺れて  
いた。

私たちは懐中電灯の光を頼りに「キャー、こわーい！」などとふざけながら動画が撮  
影されたであろう部屋へ向かった。

そして、その部屋へ着いた。

動画と同じように、部屋の中には電話があつた。

私たちは自然に手を握りあつていた。

「（こい）、よね？」

「うん、電話だけあるし、多分そうよ」

心臓がバクバクいつていた。

私の手が、ぎゅつと強く握られた。

私も強く握り返した。

そのとき。

電話が鳴り出した。

動画では、鳴った電話は取られなかった。

かけ直していたんだ。

じゃあ、私は。

「私、出るよ」

「え」

友人の手を引っ張って、空いている方の手を電話に伸ばす。

「やめなつて！動画見たでしょ?!」

それでも、私は…

「男は度胸！女も度胸！」

がちや

「も、もすもす?」

電話をとった私の第一声は囁んだ。

あの動画のように。

「」

「も、もしもし?」

「」

「切りまーす」

がちや

電話の先は無音だった。本当になんにも聞こえなかった。

変な声や音が聞こえるよりも遥かにいいと思い、私はそのまま受話器を置いた。置いた瞬間、するりと手に誰かが触れた気がしたが、気のせいだと思い込むことにした。

私は友人を見て

「ナニモキコエナカッタヨ。カエロー」

片言で言った。

内心、ものすごくビビっていたのだ。

「はは、ほらね」

友人も苦笑いをしながら返事をした。

そして、私たちは何事もなく帰路についたのである。

このとき、私は気づかなければいけなかった。

友人の手に、電話が置かれていた机の上に乗っていた万年筆が握られていたことに。

あの肝試しから数日が経った。

私は今日も何事もなく会社へ入社する。

昼休憩の時間、お茶を啜りながらメールを開くと友人から連絡が入っていた。

(どうかした?)

(今日、アタシの家来れる?)

(うん、だいじょーぶ)

(ちよつと見てもらいたいのがあるんだけど)

(おk。終わったら行くね)

「見てもらいたいのかあ」

なんだろ？

湯飲みを洗いに席を立つ私の耳に、あるニュースが流れるのは届かなかつた。

その日の終業後、私は慣れた足で友人の家へ行つた。

家に着いてチャイムを鳴らすと、友人は疲れた顔で迎えてくれた。

友人と会うのは肝試し以来だ。

「お疲れ。上がって」

「うん、」

ソファで寛いでいると、友人がコーヒーを持ってきてくれた。私の大好きなミルクと砂糖たっぷりのお気に入り。何も言わなくてもスツと出してくれる位、私たちは親しい時間を過ごしてきた。

「ありがと。あつっ」

「貴女、いつもそれよねー」

「何回やっても学ばないんでー」

「ふふっ、はいはい」

ああ、よかった。笑ってくれた。

疲れてそんな顔してるあなたなんてらしくないわ。

「で、メールで言ってたのって？」

「うん、これ」

友人がテーブルの上に置いた物は、見たことがない万年筆だった。

「？これ、あなたなの？見たことないけど」

友人が好むような物でもなかったと思う。

「この前、動画の病院行ったでしょ？電話が鳴ったあの」

「うん。それが？何もなかったよね？」

「あの後あったのよ」

友人は話始めた。

あの病院で、私が鳴るはずのない電話に出ている時、友人は同じ机に置かれたメモ書きと万年筆を見つけた。

きつとこれが動画に出ていたメモだ。

あの日二人で観た動画は、同じように電話が鳴った後出なかった。その代わり、机に残っていたメモの番号にかけ直したのだ。

そしてその後、ガラスに看護婦の姿が写る。

おそらく、噂の看護婦じゃないかと思う。

実は、二人が入った部屋の扉には「立入禁止」のテープが貼られていた。

何か事件があったということだ。あの病院で起こった事件と言えば、看護婦と医師の心中事件。

動画の看護婦はその看護婦で確定だろう。

で、私が電話に出ている間見つけたメモの横に置かれた万年筆を手にとって見ていたらしい。

そして、思わず。本当に思わずそれを持ってきてしまったのだと言う。

その万年筆が、今テーブルの上に置かれているそれ。

私を呼んだのは、一緒に万年筆を病院のあの部屋へ戻しについてきて欲しいのだという。

「行くけど、何で急に？」

「あのね、これ」

そして、次にテーブルに置かれた物に私は言葉を失った。

ばさりと音を立てて置かれた物は、大量の手紙であった。

「うわなにこれ」

「手紙」

「いや、見ればわかるけど」

「病院から帰ってきてから届くようになったのよ」

「はい?!全部?」

「全部よ。しかも、中身がマジヤバ」

中身?

一枚を手にと取って広げて見ると、頭に1つの単語が浮かんだ。

ストーカーだー!!!

私が見た手紙にはこう書いてあった。

『一目見てあなたの可愛らしい笑顔に惹かれた』

更に次の手紙。

『細く美しい指をお持ちだ』

更に次。

『綺麗な目をしている』

次。

『よく手入れされた髪と爪だ』

つぎ

『ピアスはよくない』

っ

『バランスの取れた体型だが、もう少し筋肉を減らそう』

…

『その日焼け止めは肌に合っていない』

私の顔は既にチベットスナギツネと化していた。

「…よくモテてるね」

「違うわ。これ、おかしいのよ」

「えっとー…何が？」

私はもう考えることを諦めていた。

「まずわね、手紙の封筒見てみて。全部同じだから一枚だけでいいわよ？」

私は見た。

見たことがある住所だった。そして、差出人。

消印は

なかった。

「…これ、おかしいね」



「そうでしょ?」

書かれた住所は病院のある場所だった。それも、あの廃病院のものである。

そして、差出人は男性の名前。

「アタシね。あの後この手紙が来るようになって事件のこと調べてみたのよ。そしてら」

心中事件の看護婦と医師は死亡している。

医師の名前は

「この差出人、その医師の名前と同じなのよ」

偶然?

「それに気持ち悪いわ。男からこんな手紙来るなんて」

アタシ、男なのに。

そうだ。私の友人は見た目ガッツリムキムキ男性だ。

言葉づかいや雑貨とかの好みだけは女の子だけど、れっきとした男性。オネエつていうの?

詳しいことは知らないし、全く気にしていない。だって、大事なのは「彼」が私の大切な友人だってこと。

とにかく、男性が男性に対して「可愛らしい笑顔」「細く美しい指」とか言うだろうか

?

それに、なんかやけに体について褒めてるみたい。

ようは、キモい。

「内容がこれだから」

かたん

郵便口から音がした。

「今、郵便が」

「まって」

彼が私の手を強く握った。

手が、震えていた。

「あの病院から帰ってきてから、ずっと届くのよ。こんな手紙が。今みたいに」

かたん

また、郵便口から音がした。

「気持ち悪いわ」

そうだ。気持ち悪い。

「止めないといけないよ」

テーブルの上の万年筆を見る。

万年筆には、手紙の差出人と同じ名前が刻まれていた。きつかけは、きつとこの万年筆。

「返したいんでしょ？これ」

私は笑って、彼の大きな手を握った。

答えはわかっていたのよ。

万年筆を元の所へ返せばこの手紙は止まるんだって。

一応、そのとき郵便口に入れられた手紙を廃病院へ向かう車の中で開いてみた。

すぐ閉じた。

他の手紙と一緒にコンビニの白い袋に詰めた。

歸りにでも、コンビニに寄って捨ててこよう。うん。

その手紙には

『あなたの体はとても魅力的だ』

『だから、僕の万年筆を返して』

と書かれていた。

万年筆を返してと言うだけなのに、こんなストーカー染みた「ラブレター」を大量に送りつけやがって。

廃病院に着いて、部屋へ行って。あの時と変わらない机の上に私たちは万年筆を置い

た。

電話が鳴らないうちに病院を出た。

手紙がぎつしり詰まった白い袋は、角のコンビニのゴミ箱へ入れてきた。

すまん、コンビニ店員くん。

私たちは彼の家へ戻り、いつものようにひとつの同じ部屋で眠りについた。

郵便口からは、もう新たな手紙が届く音は聞こえなかった。

今回の「ラブレター事件」が相当堪えた私たちは、しばらく軽い気持ちでホラーを観たり肝試しをしなくなった。

廃病院へ行っちゃだめ。

廃病院で鳴った電話に出ちゃだめ。

更に、その電話にかけ直しちゃだめ。

更に更に、電話の近くの万年筆なんて持ってきてきちゃだめ。

後日、私は知り合いのストーカー相談を受けた。

不気味な手紙が来るんだって。どこかで聞いた話だと思って手紙を開いたら、彼に送

られて来たラブレターとほぼ同じ内容。

お嬢さんや。どこかの病院に肝試しに行きはしませんでしたかい？

チベツトスナギツネは知り合いである彼女に尋ねた。

はあ？行つたけど…？

そこで万年筆とか、拾つてきませんでしたかい？

拾つたかもだけど、それが何？

私は自分たちに起こつた「ラブレター事件」を彼女に話した。

話したけど。

「はあ？そんなことあるわけないじゃん。

相談して損した」

彼女は私を信じなかった。

多分、万年筆はあるべき所に戻らなかつたんだらうね。

それから1週間もしない内に、彼女は行方不明になつた。

そして、発見された。

見るも無惨なバラバラな形で。

鼻の形が可愛かつた彼女。

鼻がなかつた。

長い髪が綺麗で自慢だった。

バサバサに切られ、シヨートになっていた。

足がすらりと伸びていた。

片足なかった。

彼氏に指輪を貰ったと幸せそうに話していた。

指ごと指輪はなくなった。

ヘビースモーカーであつた彼女。

肺がズタズタに切り裂かれていた。

妊娠したと最近報告をされた。

…赤ちゃん…

私はあの気持ち悪い「ラブレター」に込められた意味に気づいた。

万年筆を返して欲しい。結局最後はそうなのかもしれない。

でも、私はずっと感じていた得体の知れない気持ち悪さ。

この「ラブレター」を送った医師の「ラブ」は、「体の部位」に対して。

心中事件の医師は、外科医だった。

知り合いの彼女は、手紙で指摘された部分を持っていかれ、気にくわない部分は潰された。

「あなたは素敵だ」の言葉の裏には、「あなたの身体は物体として素敵だ」という闇が潜んでいた。

可哀想に、こんなことになるなんて。

彼女の葬式に参列して私は涙を流す。

「私のこともつと信じてくれてたら」

こんなことにはならなかったのかも知れない。

「ダメよ。あの子は貴女を信頼してなかったもの」

アタシみたいに手を伸ばすことも、繋ぐこともしなかったわ。

私の隣には、彼が手を握って一緒に立つてくれている。

貴方を守れてよかった。

貴女を信じてよかった。

貴方が隣にいてくれてよかった。

貴女がアタシを見てくれてよかった。

あなたがあなたでいてくれてよかった。

私は。

言葉で言わないような想いを手紙に乗せて送ることは絶対にしたくない。  
伝えたい相手は隣にいるんだもん。

手を握って、顔を見て、しっかりと目を見て。

本当のあなたを見つめて。

心からの想いを声に乗せて、直接あなたに送りたいの。

私と彼はとても仲のよい親友よ。

互いの指に違う愛を込めたリングがはめられても、きつとそれは変わらない。

歪むことのないその愛は、他の人には理解されないものかもしれない。

それでも、私たちはずっとずっと手を繋いで歩いていくの。

ねえ、今日は何しよっか？

いつもの角のコンビニ寄って、新作スイーツ祭りっしょ！

おー！いーねー！その後見たかったホラー映画鑑賞といきますか！

アタシ、あれスツゴク楽しみにしてたのよ！

えへん、私の一番のオススメ作品だもんねー！



今日も私たちは互いの手を握って歩いていく。

## 病院の夢

あるとき夢を見た。

白い部屋。目の前には白衣を着た男性。

僕はその男性に言う。

「一緒に死んで」

女性の声だった。

男性は困ったように笑う。

僕はもう一度言う。

「一緒に、死んで」

男性の首に細い指が絡まる。

ああ、あたしがこの人の首を締めてイルノネ。

不意に胃から何かが込み上げてきた。

げほ

口の中に血の味が広がる。

ああ、ダメよ。こんなんじや彼の首をキツくキツく締めてあげられないじやない。

僕はもう立っていられなくなって、倒れた。

最期に女性の高い声はこう言った。

「ねえ、一緒に、死んでよ」

その女性が最期に望んだのは、愛する男性との心中だった。

白い部屋。目の前には口から血を吐き倒れている看護婦。

僕は彼女に近づき、首に指を当てる。

「君は、死んでもキレイだね」

何を言っているんだろう？

僕じゃない男性の声はうっとりしたように続ける。

「ボクをあげる代わりに、ボクの一番のお気に入りを入りを頂戴」

僕は机からカッターを取り出した。

そして、倒れている彼女の指輪がはめられたキレイナユビヲ

やめて！

切り落とし、

「ああ、やっぱり君はキレイだ」

僕はそれに頬擦りして、そう言った。

再び机に向かうと、置かれている万年筆の横にあたかもそれが自然であるかの様に置いた。

この男性は、狂っている。

そう思っても夢は止まらない。

「約束だからね」

そう言うのと、今度は自分の首に刃が当てられる。

血と熱が流れ落ちる感覚が

僕じゃない！

ゆっくりと倒れる中で狂った男性がこう呟いた。

「これが、ボクの愛の形なんだよ」

それは看護婦への言葉だったのか、自分自身への言葉だったのかわからない。でも、コレガキツトタダダシイんだろう。

暗い部屋。電気もつけずに布団にくるまる。

こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい  
どこからか軽い音が聞こえる。

これは、手紙がポストに入れられる音？

かたん

かたんかたん

かたんかたんかたん

かたんかたんかたんかたん

かたんかたんかたんかたんかたん

かたんかたんかたんかたんかたんかたん

え、なにこれ。

何でこんなに

「あたしが何したっていうのよお」

震える女性の声が僕の口から出た。布団を握り締める指は震えている。

僕が何をしたっていうんだ

かたん（ぎっ）

かたんかたん（ぎっぎっ）

手紙の投函音に人の足音が混ざりだす。

逃げて

逃げられない

逃げて！

逃げられない！

指先が白くなるほどきつく布団を掴む。

ふと

音が止んだ。

「…たす」

「キレイなお嬢さん。ボクの万年筆を返してイタダキタイ」

耳の、すぐ横から声が響いた。

ニゲラレナイヨ

僕は悲鳴をあげることさえできずに

違う！

ザクザクと体を

こんな、終わりなんて

切られ、持っていかれ

自分の髪に、指に、脚に、そして腹に何かわからない刃が沈むのを見ながら、女性は  
こう口を動かした。

『こんなはずじゃなかったのに』

声にはならなかった最期の言葉は、誰にも届かなかった。

## 姉と妹「もっと歩道橋の下には」

腹の中にはバケモノが住んでいる。

得体の知れないバケモノは、「健康」であれば悪さはしないが、時に腹を酷く掻き乱すことがある。それは人によって様々だ。

しかし

酷い時には本当に酷い。

そのバケモノを飼っている本人が気づかない間に大きく膨れている時もあるのだから、なお恐ろしい。

あたしの友だちがね。最近ダイエットを始めたんだ。

何がきっかけだったのか、それはわからないけど、シンデレラ体重が〜とか



言つて食事制限を始めたんだ。

小麦粉禁止！

とか、糖質制限！

とか、雑誌に載つてる色んな

方法を試してみたの。でも、どれも長続きしない。

その子はもともとぼつちやり系なの。私もなんだけど。食べるのが大好き。

美味しいものを色々食べて、お腹いっぱい食べて、それで幸せだったんだ。月

に1度、一緒に食べ放題に行くのが楽しみだったわ。

なのに、その子、急に制限を始めちゃった。

それでね。ある時、ぱつとやめちゃったの。

それまでカロリーとか糖質とかのたつくさんの数字をメモ帳に書き込んで、今

日はあと何キロカロリーしか食べないなんて言つていたその子がよ？

ころころ変えてはいたけど、半年以上も頑張つて続けたダイエットをぱつたり

やめちゃった。

痩せたからだと思うでしょ？

確かに痩せたわ。

数カ月ぶりに会つたその子はガリツガリに痩せてた。

「久々にうちに来ない？」

宅飲みしようよ！」ってメールが着たときは、また一緒に

に食べ歩きができるんだって喜んだわ。

でもね。違ったの。

約束した日にその子のアパートへ行つて、チャイムを鳴らして。で、出てきたのは変わり果てた彼女だった。心配になって聞いたけど、その子は「大丈夫」つて答えるばかり。

部屋に入つて買つてきた物をテーブルの上に広げて、その時変に思つたの。

やけに量が多くないかな？ 　　つて。

そりや、私も以前の彼女もたくさん食べるわよ？

でも、彼女が用意し

たのは私でも食べきれないくらいの食品たち。私が用意したのはサラダも含めてバランスはそこそこ取れていたと思う。でもその子、カップラーメン・スナック菓子・ピザ・菓子パン・コンビニケーキ・炭酸飲料・アイスクリーム……どう？

異様じゃない

？

これを夜中の9時過ぎに食べるのよ？

1日で。

今までダイエットをしてきた人のやることじゃないわ。

カロリー計算どこ行つた？

よ。そもそも、こんなの食べ過ぎでしょ？

食べきれないわ。

本当に急にダイエットをやめるつて連絡が着たから、ああ、やけ食いなのかな

？  
とも思つて付き合うことにしたの。

私は別に体重は気にしていなかったから。健康は気にするけどね。

で、食べ始めたの。

私ね。その子と一緒に食べるのが本当に楽しかったんだ。食べ物のこととか日常のこととかを話しながら、笑って、愚痴を言い合って、泣いて、でもやっぱり笑って。

その子は一心不乱にただ「食べて」いた。無表情で、無言で。口に物を詰め込む作業とでもいうかな。

その姿には楽しさは感じなかった。

悲しくなつて、私の手は止まっていたわ。

しばらくして、「ごめん、ちよつとお手洗い」って言つてその子は席を立った。

私は急いでスマホでテーブルの上の写真を撮った。

彼女が戻ってきて、私はちよつと休憩しよう？

って言い出した。

お酒も呑んでいたからわざとらしくはなかったわ。私と話をする彼女は以前と変わつていなかった。

そう、思いたい。

彼女は言つたわ。

「食べても食べても足りないの。

もっと、もっと欲しくなっちゃう。

でも、前みたいにくくぶく太るのは嫌。

だからね。」

ちよつとした抜け穴を見つけたんだと彼女は言った。

それから1週間後。

彼女から「食べに行こう！」とメールが届いた。

私はちょうど暇だったから「いーよー」と返事を返した。

行った先はケーキバイキングだった。

2週間後。彼女からメールが届いた。

行った先はラーメン屋だった。

私は大盛り、彼女は特盛りを注文した。

更に2週間後。彼女からメールが届いた。

もしかして、月2で誘ってくれてる？

と笑って言った。

行った先は焼き肉食べ放題だった。

私たちは月に2回会って、飲食店の扉を一緒にくぐった。

と聞いた。彼女はやつと気づい

それは、彼女がダイエットを始める前に自然と決まっていた約束だった。毎回、私はお腹いっぱい満足して帰った。でも、きつと、彼女は

数カ月経った頃、私は飲食店の帰りに彼女とツーショットの写真を撮った。彼女は、数カ月前私を宅飲みに誘った日のようにガリガリに痩せていた。私は、その写真と以前撮ったテーブルの上の写真を別の友人へ送った。

嫌な予感ほど当たるんだな。

友人からのメールを見たとき、そう思わずにはいらなかった。

「その子、摂食障害かもしれない」

お腹の中にはね。誰だってバケモノを飼ってるの。

何かを無性に食べたくなる時、ない？

食べても食べても物足りない時、ない？

そのバケモノはね。いつだって何かを欲しがってるの。もっと、もっとって。

食べ物が欲しい。

煙草が欲しい。

お酒が欲しい。

お金が欲しい。

権力が欲しい。

麻薬が欲しい。

欲しくて欲しくて、おとなしくしていないの。

少しでも不満だと暴れだすのよ。

もちろん私のお腹にもいるわ。

ほら。もっとたくさん美味しいものたべさせろー、ってね。

だから、バケモノを飼ってる人は健康でいなくちやいけないの。

バケモノの「欲しがる欲求」に勝たないと、自分がバケモノになっちゃう。

私は、そう思っているのよ。

バケモノに負けちゃった人からはね。

どろどろしたものが滲み出している気がするわ。

心の隙間、心の弱い部分から、じわりじわりと滲み出すの。

それがバケモノ自身なのか、バケモノの涎なのかはわかんないけど。

ほら。「喉から手が出るほど」欲しがるって言うでしょ？

あの手はバ

ケモノの手なのよ。知ってた？

私の友人はね。我慢して我慢して我慢して我慢して、そのバケモノに負けちゃったの。

我慢した分、ううん。それ以上の物をお腹に入れようとしたの。でも、やっぱりそれじゃダメ。食べちゃダメって彼女の意識がストップをかけてくる。

食べたい。

食べちゃダメ。

食べたい。

食べちゃダメ。

食べろ。

食べるな。

彼女はどれだけ葛藤したんだろう。

あんなに幸せそうに食べ物をお口にしていた彼女。「食べる」ことの大切さと、その意味を知らないはずがなかった。

彼女の中のバケモノはどっちを迫ったんだろう。

食べるって？

食べるなって？

わかんない。でも、結局彼女は「ああ」なっちゃった。

しばらく経って、私はその子に連絡を入れた。

ちよつと会えない？ っ。

彼女からはいいよって返事がすぐに来た。

約束の時間になって二人が揃うと、私はすぐに要件を言った。

貴女、摂食障害でしょ。

彼女は小さな声で、なんぞと言った。

手、出して。

私は差し出された彼女の痩せた手をとった。

まさに骨と皮だけの痩せた指だった。その指に、硬いタコができていた。最後に握ったときはこんなものなかったはずなのに。



私はそのタコを指差して言った。

これ、吐きダコなんでしょう？

彼女の表情が凍ったように冷えた。そして、少し迷った後で、うん、と頷いた。  
ああ、やっぱりかあ。

「吐きダコ」っていうのはね。

口の中に限界まで指を突っ込むと、指の関節が歯に当たるんだって。それを何回も何回も続けると、タコになる。これが「吐きダコ」。

何のために口に指を突っ込むのかって？

決まってるじゃない。

食べた物を吐くためよ。

摂食障害の症状にはいくつもあるの。

食べて食べて食べまくる。

お腹の中のバケモノが際限なく「寄越せ、寄越せ」って欲しがるパターン。

こうなると、後はぶくぶく太っていくだけだよね。

全く何にも食べない食べられない。

これは逆にバケモノが「食べたくない」って拒否するパターン。

ガリガリに痩せて点滴生活、かな。

それと、これが彼女の症状。

食べて、吐く。

バケモノは欲しがってるけど、本人は食べたくない。だから意識的に口の外に出そうとする。

もしくは、その逆。

本人は食べたけれど、バケモノは食べたくない。

そうになると、1回は口に入れるの。1回はね。でも、次の瞬間には吐き出すの。べつ、とね。

すぐにじゃなくても、胃に吸収される前に吐いちゃう。

だから、体は「食べていない」状態。つまり、彼女みたいにガリガリに痩せている状態になるの。

でもね。ここが怖いところよ。

すぐに出すとは言っても一度は食べる。

「どうせ吸収されないんだから、いくら食べても大丈夫」って考えになるのよ。

そう、思っちゃうのよ。

だから、心は軽くなるよね。我慢しなくていいんだからさ。

頭も満足するの。実際に「食べる」行動をして味を感じて。自分は食べてるんだ、美味しいなって思うことができるんだもん。

だから、たくさんたくさん口にすること。

異常な量を食べる人は、その全員が消化できてると思っちゃダメよ。中には、こういうふうに出てる人もきつというはず。

これを治そうとするには、ただ単に吐かなければいいって話じゃないらしいわ。

何回も繰り返すと癖になっちゃうんですって。食べたらずくっていうのを体が覚えちゃってるの。

食べたらずかなくちゃって思うのよ。

いくらバケモノがおとなしくなっても、吐かなければいけないって刷り込まれちゃってるのよ。

きつと、彼女も。

可哀想に。

あんなに美味しい食べ物も、美味しいって笑っていた彼女自身も、みんな吐き出しちゃったのね。

本当に、本当に、可哀想。

だから私は彼女に言うの。

「吐かなくなるまで、私、貴女に会いたくないわ」

彼女、すごくシヨックを受けた表情だった。私は笑って言った。

「笑顔で、本当に美味しいって言える貴女と一緒に出掛けたいの。一緒に食事したいのよ」

うまく、笑えたかな？

彼女は「わかった」と言った。

どれくらいかかるか分からないけど、お医者さんに診てもらってしっかり治す。だから、また会って一緒に食事にいきましょう。

彼女の言葉に、私は「うん。また会いましょう」と返した。

それ以来、私はまだ彼女に会っていない。メールのやり取りはあっても、約束通り会うことはしていない。

誰だつて人は自分の中に「バケモノ」を住まわせている。バケモノはいつだつてもつと、もつと何かを欲しがる。

私の友人はダイエットをしていたの。ただの、ダイエットよ。

それがいつの間にか摂食障害を引き起こしてしまった。彼女の中のバケモノを飼い慣らそうとする余り、我慢をし過ぎたのね。

姿形も見えない、いるかもわからない得体のしれないバケモノ。欲と衝動に飢えたバケモノ。

彼女は、そのバケモノにいいように扱われたわ。

ねえ、周りを見てみて。

ストレスだと頭をかきむしってる人、タバコを何十本も吸っている人、家の冷蔵庫に何十本もアルコールを冷やしている人、ほんの数分だつてスマホの画面から目が離せない人、ゲームの課金が万を越えても止められない人、他の人の悪口が止まらない人。

こんな人たち、知らない？

バケモノはもつともつと、足りない足りないって喚びてる。

バケモノが暴れていると、こんな風に何か表に出てくるの。

どろどろした、何かがね。

私は自分の腕を見る。

自分でつけた古い傷がいくつも残る腕を見る。

例えばね。

リストカットの癖を完全に治したいなら、最低でもリストカットを続けた年月と同じ時間を止めないと治ったって言わないそうなの。

私の場合には20年位かな。

最近、やっとバケモノが落ち着いてきたところよ。

昔は私のバケモノは、「もっと痛みを寄越せ。生きているという実感を見せろ」ってうるさかったわ。

最近、やっとおとなしくなってきたとこなの。

私の友人は、どれくらいで摂食障害が治せるのかな。

治ったらまた一緒に食べに行こうと約束した彼女。

彼女と食事に行けるのはいつになるだろう。

彼女とは、まだ、再会できていない。

バケモノがまた騒ぎだしそうだ。

私の古傷だらけの右手には、キラリと光るカッターが握られていた。

バケモノは、今はまだ、おとなしくしている。

今は、

まだ。

ね。

そういえば。彼女がダイエットを始める前によく話してくれた菜摘っていう妹ちゃん。確か、次の三月に高校を卒業して製菓学校へいくって聞いていたはずなんだけど。どうなったのかな？

今日も私は歩道橋を渡って仕事に行く。

鞆の中にはカッターを、心の中にはバケモノを仕舞い混んで。

歩道橋の下から甲高いクラクションが肌寒い風と一緒に吹き抜けていった。

私は。彼女がどうしてそうだったのか全く知らない、外側の人間よ。相談もされなかったし、一緒に居ることもできなかった人間。

そう、彼女たちの話のエキストラ。

でもね、どうかこの話たちを聞いている人に考えて欲しいの。

自分はどうなのか、って。

欲しい欲しい、もっともつと無闇に手を伸ばしちやいけないわよ？  
手を伸ばした先に何があるかなんて、わかんないんだから。